

とりたに
鳥谷選手

中村 龍介

野球の話で恐縮だが、物心ついてからの私は大のプロ野球ファン。神戸生まれで神戸育ちの御多分に洩れず、大のトラキチである。

シーズンが始まると落ち着かない。タイガースの試合に一喜一憂、家に居るときは必ずテレビの中継を観る。気が向けば、近隣の球場に出かけてタイガースを応援する。年に二度は甲子園まで足を伸ばす。

野球はサッカーやラグビーと同じように団体競技だ。個々の選手の技量がどんなに優れていても、そのチームが勝利するとは限らない。チームの勝利は、個人の技量だけでなく、野球に対する姿勢によって大きく左右される。『チーム・プレイ』が問われるのだ。

例を挙げよう。昨年の日本シリーズ最終戦。セリーグで勝利を収めたタイガースはパリーグの覇者・ソフトバンクと対戦した。

場面はソフトバンクが一对〇でリードの九回表、タイガース最後の攻撃。一死満塁で打者は西岡。ボール・カウントは三―〇。

この場面で、西岡選手が後一球ボールを選べば、押し出しの四球で同点となる。が、もしヒットを打てばランナー二人が生還して逆転となる公算が大きい。三ボールなので、投手はボール球を投げるわけにはいかない。多分、打ちやすい球が来るだろうと西岡選手は読んだ。そして運命の一球が投げられた。

真ん中高めの直球。見送ればボールの球。が、西岡選手は強振した。結果は一塁ゴロ、ダブルプレーで万事休す。タイガースは敗れた。

結果論からすれば、ボールを待つべきであった。もし四球を選べば、同点となって勝負の行方は分からなかった。目立ちたがり屋の西岡の選択は強行策だった。自分が打てばチームの勝利につながる。そして、彼自身はヒーローになれるのだ。

こういうケースで、絶対に打ち気にはやらない選手が居る。それが、鳥谷選手だ。もちろん、鳥谷だってチームの勝利を願っている。が、可能性から考えて、ヒットが出るよりも四球となる確率が高い場面、四球を選んで、先ずは同点にしておこうと、『待ち』を選択するのだ。

鳥谷選手は自分が手柄を立てるよりもチームが勝つことを優先する。いわゆるチーム・プレイに徹するタイプ。

六大学時代は早稲田の三番を張って、強打で鳴らしていた。華麗な



1694 本目の安打を放った瞬間の鳥谷選手。
これで初代 Mr.タイガース、藤村選手の記録を抜いた。

守備力と相まって、各球団から注目されていた。が、当時認められていた自由契約枠という制度を適用して、争うことなくタイガースへの入団が決まった。この時、巨人、西武、横浜の各球団が鳥谷の獲得を目指し、多額の契約金を準備していた。だが、鳥谷は「お金で自分の将来を決めたくない。そんな人間だと思われるのが一番嫌だ」と語り、二〇〇四年、自分の希望するタイガースを選んだ。

入団当初から一軍の遊撃手として活躍、今年五月には、千五百試合連続出場という記録を達成した。

鳥谷は今やタイガースの主力選手で人気も高い。そんな鳥谷だが、野球に対する態度は『くそ』がつくほど真面目だ。本塁打を打つても派手なガッツポーズはなく、ニコリともしない。相手投手に失礼だという配慮からだ。自分が目立つことがイヤなのだ。チームが勝利した試合の後、ヒーロー選手がインタビューを受ける『お立ち台』に立つのが大の苦手。だから、彼のインタビューは概して面白くない。

お立ち台では、「最高です！」や「やりました！」と、大きな叫び声で、観客を喜ばせる選手が多いが、鳥谷は嬉しそうな顔もせず、淡々とインタビューを受ける。アナウンサーからの次の質問に対する鳥谷の答えは何時も同じだ。

「決勝打の場面、どんなことを考えて打席に入りましたか？」

「後につなぐことだけを考えて打席に入りました」

そう。『後につなぐ』こと。それこそが鳥谷の目指すチーム・プレイの要諦なのだ。

【二〇一五年七月記 原稿用紙約五枚 課題「つなぐ」】